

＜研究課題名＞	D-1006	熱帯林のREDDにおける生物多様性保護コベネフィットの最大化に関する研究		
<p>＜研究概要＞</p> <p>本課題は、熱帯林におけるREDD（森林減少・劣化に伴う温室効果ガス排出の抑制）の実施において、生物多様性保護コベネフィットが最大に達成されるための技術開発を目的とする。その対象を保護区ではなく、熱帯材産出のための森林経営がなされている生産林とし、レーザー技術による高さ方向での構造把握が可能な衛星LiDARを用いて熱帯林の3次元構造を評価し、管理区スケールにおいて3次元構造の変化からバイオマスの変化を推定する技術を開発する。また、実務レベルで実施が可能な生物多様性の広域モニタリング手法を開発する。</p> <p>(1) リモートセンシングによる森林の3次元構造とその変化の把握手法の開発 10万^{ヘクタール}レベルの熱帯林管理区を対象として、衛星LiDARを用いた森林の3次元構造の把握手法を開発する。また、高分解能衛星から得られる林冠の面的構造と組み合わせることにより、リモートセンシングによる森林バイオマス推定の高度化を図る。</p> <p>(2) REDDにおける生物多様性の効果的モニタリング手法の開発 10万^{ヘクタール}レベルの熱帯林管理区を対象として、樹木と哺乳動物の群集組成変化を指標とした、実務レベルで実施が可能な生物多様性の広域モニタリング手法を開発する。樹木群集においては、衛星データを用いた層化手法（調査区数を減らすために、10万^{ヘクタール}レベルの管理区を幾つかのクラスに分類すること）、調査区のサイズ、数、配置デザインについて研究を行う。哺乳動物群集においては、自動撮影カメラの設置および解析方法の研究を行う。</p>				
＜研究代表者＞	北山 兼弘		京都大学・農学研究科・教授京都大学（52才）	
No.	サブテーマ名		氏名	所属機関名・部局・役職名
(1)	リモートセンシングによる森林の3次元構造とその変化の把握手法の開発	○	平田 泰雅 齋藤 英樹	(独) 森林総合研究所・森林管理研究領域・環境変動モニタリング担当チーム長 (独) 森林総合研究所・九州支所主任研究員
(2)	REDDにおける生物多様性の効果的モニタリング手法の開発	◎	北山 兼弘	京都大学・農学研究科・教授